



校歌碑 ↑

楠の若葉が輝く季節になり、今年も本校生にとっては最大のイベント・一高祭が近づいて来ましたね。昨年は本校史上最大の来校者があったとのこと、年々賑やかになってきているようですね。こうした学校行事に欠かせないものの一つに校歌があります。ところで諸君は旧本館前校庭の一角に『沃野一望数百里…』の校歌の碑が建っているのをご存知でしょうか。これは、進修同窓会結成25周年を記念して、昭和38年に本館玄関前に建設されたものです。この碑は、昭和62年、学校創立90周年を機に整備された旧本館玄関前左側の庭園に移され、もとの姿をとどめています。今号では、この校歌について考えてみたいと思います。

誕生直後の校歌（「進修」第14号に掲載）↓

沃野一望数百里 そより立ちたり筑波山 湛へて寄する瀧波は	二	春の彌生は櫻川 流に浮ぶ花筏 渡る雁聲ひえて	三	此の山水の美を享けて 此の秀霊の氣を享けて 東國男児の氣を享けて	四	筑波の山のいや高く 嗚呼櫻水の旗立てて 龜城五百の健男児
關八州の重鎮として 空の碧をさながらに 終古流らぬ霞浦の水		其の源の香を載せて 蘆の枯葉に秋立てば 湖心に澄むや月の影		我に寛雅の度量あり 我に至誠の精神あり 我に武勇の氣魂あり		霞ヶ浦のいや高く 我 校風を輝かせ 龜城五百の健男児

旧制中学校校歌

明治四十年代に続々誕生

今年、卒業四〇周年の祝賀式に出席された高21回の松井泰寿氏（守谷高校長・元本校教諭で『進修百年』の編纂に携わる）は、本校では創立十数年後の明治44年にやっと校歌が制定されたが、どうしてなのかと疑問を呈されていた。調べてみると、明治期に創立した旧制中学校では、校章は創立時に制定されているが、校訓や校旗、校歌は創立後相当の年月が経ってから制定された学校が多いようだ。

水戸中学校（明治11年創立）の校歌が誕生したのは明治41年（1908）であり、本校と同時に創立した下妻中学校では明治43年につくられている。全国的に見ても熊本県立熊本中学校は、創立十周年を記念して明治43年に、明治32年創立の三重県立第三中学校（現上野高校）の校歌も明治41年に制定され、その多くは明治四十年代前半につくられている。その理由についてはよくわからないが、下妻中学校の分校として明治33年に創設された水海道中学校も、校歌ができたのは明治43年であり、『済美百年』（水海道一高百年史）に校歌制定

について「いずれの中学校も校歌誕生までに一〇年以上の歳月がある。これだけの年月を経ればその学校の教育目標や方針も確立、校訓や校是の制定し、校風も生まれるからそれを校歌に詠って学校への所属感や一体感をいっそう強めよう」という機運が生じたのであろう」と記している。

自前の土浦中校歌

当時、校歌を作成するには作曲という困難な壁があった。したがって多くの学校では校歌づくりを専門家に依頼している場合が多い。熊本中の校歌は作詩・作曲ともに専門家の手になるもので、特に作曲者は「春の小川」や「朧月夜」などで知られる岡野貞一である。水海道中の校歌も作詞家は東京音楽学校（現東京芸大）の国文学教授、作曲者も同校助教であった。

また、水戸中のように当校教師が作詩を担い、作曲は外部の専門家に依頼するというケースも多い。水戸中校歌は師範学校音楽教師が作曲したものである。

三重県の上野中も同様で、作詩は博物担当の教諭だが、作曲は東京師範学校教員で、「一寸法師」や「青葉の笛」など明治の名曲を数多く作曲した田村虎蔵である。

こうした中で下妻中の校歌は異色なものといえよう。当時五年生二人の合作で横瀬夜雨が筆を加えた詩を、旧制一高の寮歌「嗚呼玉杯に花うけて」の曲にのせて、生徒たちの間で自然に歌われ続けていくうちに校歌として認知されていった『為校百年史』という。そういえば、竜ヶ崎中の校歌も同様に、曲は旧制一高寮歌「アムール川」のものを借用している。

その点からすれば、土浦中の校歌はその作成過程からみて健全なものである。歌詞は生徒の公募によるもので、入選した四年生堀越晋の詞を本校教諭尾崎楠馬が補筆し、作曲した。国漢科主任でありながら、音楽にも堪能な尾崎青年教師の存在が、自前の校歌誕生を可能にしたのである。

歌われなかった三番

本校校歌は、一番で、筑波や霞浦の雄大な自然を、二番では、郷土の美しい季節の移ろいを、三番で、この素晴らしい風土に培われる若人の心意気を、そして最後の四番で、この学び舎での青春を誇らかに歌い上げている。制定以来歌い継がれてきたこの校歌は戦後、しばらくの間、三番が姿を消した。終戦後、戦前・戦中の軍国主義教育を排除し、民主化を進めるといふ政策のもと、全体主義的なものはタブーとされたのである。三番の「東國男児の氣を享けて 我に武勇の氣魂あり」というフレーズがこれに抵触するということ

で三番が歌われなかったのである。水戸一高の校歌は、左に掲げたような歌詞であったがため、自主規制によって戦後は全く歌われず、昭和25年ごろから、一番だけ歌われるようになった。一・二番とも歌われるようになったのは四〇年代後半からである『水戸一高百年史』という。本校でも三番が復活し、全節歌われるようになったのはやはり昭和四〇年代になってからである。

それにしても、本校校歌の三番は全歌詞の主題をなす部分である。これを欠いた校歌しか歌えなかった当時の生徒たちが、三番の存在を知ってどんな感慨をもったであろうか。ともあれ、本校の校歌は生徒によって生み出されたものであるだけに、説教がましくなく、曲も簡潔で歌いやすい。それでいて伝統校としての風格を感じさせる校歌である。

水戸第一高等学校校歌

古賀快象 作詩 片岡龜雄 作曲

- 一 旭輝く日の本の 光栄ある今日のものとは 義人烈士の功績ぞ 忠孝仁義の大道を 貫く至誠あるならば 天地も為に動きなん
- 二 世界にきわつ列強と ならびて進む帝国の 基礎は堅忍力行ぞ 花朝月夕つかのまも 古人に恥じぬ心して ゆめ怠るな一千人